



PEN インターナショナル
ヴァン・グエン・インタビュー

ヴァンの通訳の声：

夢はありません。コンピューターサイエンティスト、技術者、また何になるという夢を持ったこともありませんでした。何もなかったのです。教育もなくベトナムで働いている他の人々と同じように。誰も夢など持っていないのです。

ナレーター：

ベトナムの若い聴覚障害者には希望などほとんどありません。ヴァン・グエンはベトナムに生まれ、6人家族の中で聴覚障害の子供二人のうちの一人でした。彼女が子供の頃、母国の聴覚障害者が直面する教育的、社会的、そして言語の障害を逃れるために、家族はアメリカに移って来ました。アメリカでヴァンはメインストリームの学校に行き、英語とアメリカ手話の二言語を学びました。

ヴァンは大学卒業後、カリフォルニア大学に採用され、情報工学コンサルタントとして働いています。

ヴァンの通訳の声：

仕事をしているときの私のゴールはいつも、ひとりひとりが出来るだけテクノロジーを楽々と使えるようにすることです。テクノロジーは、本当に素敵なので、使ってみるのが本当におもしろいものだとは感じています。ですから人々がもっとも効果的に仕事出来るようにテクノロジーを使いたいですし、そのために一対一で教えなければならない、本当にゆっくり教えなければならない、あるいは相手が問題なく使えるようになるまで何度も何度も繰り返して説明しなければならないなら、私はよろこんでそうします。

時々、学生、教職員、教員にテクノロジーをもっと効果的に使うにはどうすればいいのか理解してもらうために、違った方法で説明しなければならないこともあります。確実に理解してもらうためなら、私はよろこんでどんなふうにでも説明します。

テクノロジーは素晴らしいものなのだとすることを、人々と分かち合いたいです。何となく無視していても、それなしに仕事が出来て、それでオーケーという類のものではありません。とても重要な仕事の一部なのだと考えて欲しいのです。そして私が教室で学んだことをここのスタッフと分かち合えるということがとて



PEN インターナショナル
ヴァン・グエン・インタビュー

も大切なのだと思います。その結果として、彼らの仕事がより能率的になるのです。

私は家族と一緒に17年前にアメリカに来ました。ここに来た理由は、私たちは共産国に住んでいましたので、ここアメリカには聴覚障害の子供たちによりよい機会があるということがわかったからです。アジア文化では多くの場合聴覚障害者は受け入れられないのです。私は自分が動物であるかのように感じたものです。人々は、私たちにどこかおかしいところがあるかのように、農場かどこかで働くべきじゃないかというように私たちを見るのです。アジアには、私たち聴覚障害者に真の未来はありません。どこに行っても教師、人々、みんなが軽蔑の目で私たちを見るのです。そして私はまったく重要でない存在で、夢や未来を持つことも許されない、というふうに感じていました。それで私はだんだん人を避けるようになり、自分自身が何者であるかもわかりませんでした。あるがままに私を認めてくれる人がいなかったからです。常に社会から引き離されていました。そして…それはほとんど、私に何か病気があってそれが人々にうつるかもしれない、あるいはそれで彼らも聴覚障害になるのではないかというふうで、だからそれを恐れて人々は私たちを迫害するという反応を示す、とでもいうような感じでした。

私は、他の人たちととても親しくなって、コミュニケーションし、自分も国の一部なのだ、これが私の故国なのだと感じたい、人々と自然なコミュニケーションや交流を持ちたいと思っていました。でも、それらのどれも出来ませんでした。私はほとんど自分だけの世界にひとりぼっちで、とても隔離された状態だったのです。アメリカに来るまで、手を使ってコミュニケーションが出来ることさえ知りませんでした。世界中で聴覚障害者は私たちだけだと思っていたのです！ここにこんなに大きなコミュニティがあるなんて、全く思ってもみませんでした。こんなにたくさんの聴覚障害者がいるのです。皮膚の色も違ういろいろな人がいて、子供だけではなくて、大人の聴覚障害者もいるなんて。

ここアメリカに来る前に住んでいた家は藁葺きでした。強い風が吹いたりすると、家は簡単に倒れてしまいます。よく丈夫に建てられたものではありませんでした。

学校には2年行きました。幼稚園、1年生、2年生と通い、やめました。正直に言うと、私は学校が大嫌いでした。他の子供たちがいつも私をからかったからです。学校ではとても差別され、何も知りませんでした。ベトナム語は読唇するのがとても難しく、どんなコミュニケーションの方法を学ぶのもとても困難でした。



PEN インターナショナル
ヴァン・グエン・インタビュー

ベトナムには手話がありませでした。聴覚障害者のための教師もいませんでした。そのころのことを思い出してみると、補聴器も持っていませんでした。わずかな聴力を支援するものも全くなく、父、母が他の人の言っていることを口の動きで伝えてくれるのに頼っていました。そうでなければ筆談をしなければならず、相手はいらいらして、私とコミュニケーションするのを簡単に諦めてしまうのです。

母は私たちに、母国語であるベトナム語を教えようとししました。そしてアメリカに移って来たとき、6年生から本当に教育をスタートしました。そのとき私は11歳でしたから、低学年に戻ることは出来ません。11歳で2年生に戻ることは出来ませんから、自分の年齢の学年に入って出来るだけ頑張るしかないのです。

7年生、8年生になると、どんどん宿題が増えました。作文もたくさんありました。高校では友だちができ、その友だちから語彙をたくさん学ぶことが出来ました。自分の辞書も買いました。絵のたくさん出ている英語ベトナム語／ベトナム語英語辞書で、それがとても大きな助けになりました。その当時、辞書が私の一番の親友だったと思います。他のみんなについていく手助けになりました。

大学にはあまり行きたくありませんでした。どれだけ宿題があるかと心配だったのです。私の先生は大学に行けと強く勧めました。そして私のことを応援、激励してくれたそのときの先生方をいま振り返ってみると、私に成功して欲しかったのだなということがわかります。先生方には私には大きな可能性があり、大学に行くのは私にとってとてもいいことだとわかっていたのです。私にはそれがわかりませんでしたが、先生方にはわかっていたのです。私の将来にどういう可能性があるか、知っていたのです。ですから今、私は先生方にとっても感謝しています。教師はととてもとても大切だと思います。生徒が自分の可能性を達成するように激励するというのは、とても価値のあることだと思います。先生方がいなかったら、今の私はありません。

メリ・ピアソン：

ヴァンは初勤務の日早く来て、遅くまで残っていました。ヴァンはだいたいいつもそうです。とても強い労働観を持っています。ヴァンは西部アウトリーチセンター&コンソーシアム（ROCK）に技術援助と支援を提供していました。

ほとんど即座にヴァンは自分の役割を拡大し始めました。国立聴覚障害センターのウェブサイトには統一したイメージを持たせる必要性に気づき、ウェブサイトを



**PEN インターナショナル
ヴァン・グエン・インタビュー**

持つ特別プロジェクトのそれぞれが十分な共通点を持っていて NCOD としての外観を保つよう、もっともよく機能すると思われる基準を設定しました。その後ヴァンは、ウェブでのインスタントメッセージ・システムの概念を私たちに紹介することで、さらに役割を拡大しました。またデスクからデスクへのミーティングにテレビ会議を導入することも強く支持しています。周りの人々みんなの環境が向上するよう、彼女はそのリーダーシップの役割を受けたところです。

ヴァンの通訳の声：

他の人たちと交流し、私の専門的技術知識を分かち合い、知識を分かち合うのは本当に楽しいですし、小さな電球がぴかっと光って理解し、彼らが自分で出来るようになるのを見るのは本当に楽しいです。

「稼ぎ手」という言葉が嫌われていることは知っています。でもそれがこのレターの意味することなのです。私の家族にとって、財政的には私が稼ぎ手だったのです。家族には家を買ったり、家賃を払ったり、食べ物などを買うのにさえ十分な収入はありませんでした。家族の夢は家を買うことでした。私は家族に、待ってくれ、まず学校を卒業させてくれ、と言わなければなりませんでした。そして私は辛抱強く頑張って学校を卒業しました。私にはそんなに多くの収入はありませんでしたが、いつか家族が欲しがっている家を買うことが出来るのだという夢を持って、出来る限りお金を貯めていました。そのために本当にみんな力を合わせました。家族が生き延びてもっと成功するように、ひとりひとりがそれぞれ特定の責任を持ちました。ホームレスにはなりたくなかったからです。ベトナムにいたときよりもよい生活が出来るようになりたかったのです。そしてついには家族の生活を変えることが出来ると思っていました。ですから、ええ、私は家族を支えています。主に財政的にですけど。

家族の中で学位を、大学の学位を取ったのは私が最初の世代です。それに、家族がとても成功していることを誇りに思います。もう苦労しなくていいのだ、と。私たちは今アメリカにいて、とても多くの機会を与えられていることを誇りに思います。この国にとってもとても感謝しています。